

2017. 10. 25 (水)

過疎の島の試行錯誤から見出された「幸せ」

白波瀬 達也

沖縄県の宮古島に隣接する池間島

今回、「『幸せって何だろう?』ということまで話をしてください」と言われたのですけれども、僕にとってはかなり難しいテーマだと思いました。自分のことを話してもよかったのですけれども、皆さんも「幸せって何だろう?」と言われたときに、なかなか答えが出ないと思います。それと同じで、僕も自分事として語るのはすごく難しいと思ったので、最近やった調査の話をしながら、そこで気付かされた幸せについて話をします。

これは僕が撮った写真です。とてもきれいな海でしょう。沖縄県宮古島の隣にある池間島の写真です。ここは過疎がすごく進んでいる島で、限界集落に近い場所です。そこに学生と一緒に、この夏に5日間行って調査をしてきました。

池間島は関西からだて飛行機で宮古島まで行って、飛行場から車で30~40分ほどの距離にあります。すごく小さい島で、車で回れば1周しても15分ぐらいでしょうか。現在、人口が約600人で、350世帯ぐらいが暮らしています。かつては、もっと人口が多かったのですけれども、年々人口が減少していったって、今は高齢化率が46.5%と非常に高いのです。25%を超えていたら高齢

化社会、30%ぐらいになってくると超高齢化社会と言います。50%を超えると、一般的には限界集落とみなされますが、池間島はそれに近い状態です。

池間島には御嶽(ウタキ)と呼ばれる聖地がいくつもあります。そこでは、この島固有の祭祀があります。こういった独特の宗教観を持った文化・風習が残りに残ってきたのですが、今、人口がどんどん減少していくなかで、それらを守ることが難しくなっています。

かつては、カツオ漁業が盛んで、高度経済成長期にはこの小さい島にダンスホールや映画館があるぐらい、にぎわっていたそうです。しかし、カツオ漁が衰退していくなかで、若い人たちがどんどん流出していったって、高齢者ばかりになり、先ほど言ったダンスホールや映画館が閉鎖。学校もどんどん規模が小さくなり、近い将来廃校になりかねない状況です。

なぜ、僕がここに行ったのかということですが、この島の衰退を止めるために地域活性に向けた取り組みを積極的に進めているからです。他の島ではやっていないような新しい取り組みが非常に興味深いなと思っていて、実際に視察に行ってきました。

過疎化が進むなかで再発見される幸せ

当初は、この島で、「幸せって何だろう」ということを考えて行ったわけではありません。しかし、5日間行かせてもらって、いろいろ島民の話を聞くなかで、この地域における幸せが何なのか気付かされたので、そのことについてお話をしていきます。

池間島のなかに、いけま支援センターというNPOがあります。僕はここを主に調査しました。池間島からどんどん人が離れていく、産業がなくなっていく、このままでは、この島で生活していくのも難しくなってくる、こういう状況のなかで何とかしなきゃということで2004年に、池間島出身者のおばちゃんたちがNPOを立ち上げたそうです。問題は放置していたら、何も起こらないので、とりあえずやってみようということです。

「若者は島を捨てる」。これは池間島のおじいちゃん、おばあちゃんの口癖だそうです。おじいちゃん、おばあちゃんたちはずっとこの島に生まれて、この島で育って、この島で死んでいったのだけれども、若い世代はどんどん島から離れていってしまっ、宮古島、沖縄本島、あるいは東京、関西に行って仕事をする。池間島に仕事がないからです。ここにも仕事がないから、仕事を求めて離れていってしまう。それで、取り残された高齢者が、どうやって生きていったらいいのかという不安を抱えながら暮らしている。

自分たちの子どもと一緒に島を離れる高齢者たちもいますが、長い人生、島から離れて暮らしたことがない場合、全然知らない場所で暮らすことは相当な精神的負担になります。すごく小さい島で、コミュニティの紐帯

が濃密なところなので、いきなり都会に行くと、家族と一緒に暮らしても、そこでは幸せをなかなか感じられない。だから出て行きたくない。さりとて、高齢者ばかりのこの島で、どうやって生きていったらいいのか。

たとえば、池間島には病院がなく、宮古島の大きな病院に行くためには車がないと大変です。病気になったときに、どうやって暮らしていったらいいのか、そういう不安を抱える高齢者がたくさんいることをNPOの活動を通じて発見していったそうです。

のちにNPOを立ち上げることになるおばちゃんたちは、まず高齢者の声を聞き取ろうと考え、集まりの場所、サロンを作って、その後、高齢者のための介護事業所を設立します。こういうふうにして、徐々にこの地域で生きていける環境を作っていきました。先ほど写真で見せた集落は非常に狭いので、みんな顔見知り。何とかのおじい、何とかのおばあ、僕は達也という名前だから、池間島で高齢者だったら達也じいさん、みたいな感じで、みんな苗字だけでなく、名前も知っているんですね。

孤立死の発生が示した地縁のゆらぎ

孤立死と聞くと、地縁が薄い都会での出来事のように思ってしまうがちです。しかし、池間島でも孤立死が起こったことがあるそうです。この出来事をきっかけに、この島ではコミュニティ再生の必要性が島民に共有されるようになりました。先に紹介したNPOが最初に手がけた事業は介護に関するものです。私たちが訪問した時には90歳ぐらいのおじいちゃんたちが、介護事業所にいつも集まっておしゃべりしたりしていました。この

ような集いの場を 2006 年から開いています。

ここに来ていた高齢者は多くが配偶者を亡くした単身者でした。NPO の職員に同行させてもらって、高齢者の家を幾つか訪ねたのですが、90 歳を超えたおじいさんとか、おばあさんが一人で暮らしているのを目の当たりにして心底驚きました。NPO のスタッフが、各家庭にどんどん入り込んで、いろいろお世話をやって、何とか一人でも暮らしている環境を作っていました。制度によって定められた時間だけを訪問する介護事業のイメージとはかなり異なるイメージでした。介護事業がまさに地域の支える根本的なセーフティネットになっていました。

普通の暮らしの延長としての民泊事業

この NPO が次に手がけたのが民泊事業です。これがとても面白いのです。池間島は、先ほど言ったように、海はきれいなものだけれども、映画館もなければ、遊ぶ場所もない。要するに観光地としての分かりやすい魅力が希薄な島です。でも「自然が豊かで観光地化されていない」といった特性をうまく生かして、普通のおじちゃん、おばちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんが住んでいる家に泊める民泊プロジェクトを始めたのです。

現在は島外からの修学旅行生を主なターゲットに展開しています。今回、調査を兼ねて僕も 80 歳以上の一人暮らしのおばあちゃんの家に泊めさせてもらいました。そこでは、おばあちゃんが作ったご飯を食べるとか、おばあちゃんと一緒に家事をやるとか、おばあちゃんは日常とあまり変わらない暮らしをするのです。もちろん、ご飯を作る量が少し増

えたりはするのですが、宿泊客はこの地域のご飯の作り方を教えてもらったりすることで交流を深めます。いわば、このおばあちゃんが日頃やっていることを、宿泊客たちも一緒に体験させてもらうプログラムです。

お客さん向けに特別なことをするわけじゃなくて、いつもどおりのことをすることで、おばあちゃんは現金収入が入る。これが大きな魅力です。また、ずっと一人暮らしを続けている高齢者は、日中、会話する相手があまりいなかったり、あるいは同じ世代の人たちばかりと話をしたりしがち。でも、若い人たちとおしゃべりすることで元気が出るといった効果もあるようです。このように池間島の民泊事業は泊める側・泊まる側双方に魅力があり、近年は多くの学校が池間島を訪れるようになっています。なお、このおばあちゃん以外にも池間島では 15 世帯が民泊の受け入れをやっています。

島の知恵を継承する

池間島では、アダンや月桃という植物があるのですが、かつてはこれらを使って生活用品を作る習慣がありました。しかし、どんどん工業生産品を使用するようになり、こうした伝統がすっかり衰退していきました。私が訪問した NPO ではこれらを伝統文化として見直し、「シマ学校」というプロジェクトで、生産・交換・販売といった取り組みを進めていました。このようにして、若者の流出によって継承されていなかったものを新しい形でつなげていこうと試んでいます。そのことによって、世代間交流が活発になってきたそうです。

池間島は高齢化が進んだ地域なので、高齢

者を手始めにいろいろな支援をやってきたのですけれども、2017年の夏から、地域の子どもを対象にした取り組みも進めています。僕が訪問した時は、地域のおばあちゃん、おじいちゃんと一緒に、子どもたちが缶ぼっくりを作っていました。実はこのおじいちゃん、おばあちゃんは、小学生たちの祖母ではないです。

かつて池間島では「島の子どもは島の大人たちで育てる」という感覚が強くて持たれていました。今までは自然に、そういうつながりができていたそうです。しかし、だんだん島が衰退していくなかで、こうしたつながりが希薄になってきたので、事業としてプロジェクトをどんどん進めて、かつてあった地縁を再強化する取り組みもしています。いわば何か新しいことを始めるというより、もともとあった良い部分を再生するような取り組みです。

民泊事業の魅力と課題

民泊の話に戻ります。この事業の面白さは何なのかということですが、高齢者が子どもたちに、自分の知恵を教える役割を得ることができる。これがすごいミソだと思うのですよ。高齢者は、取り残されて、この島には魅力がなくて、どんどん人が離れていく。そうした状況のなかでは、自分の生き方を悔いたり、あるいはこのままでいいのだろうかという不安を抱えながら生きたりしかねない。しかし、民泊事業は自分の今までやってきたこと、経験みたいなものを子どもたちに教えることができる。それが自己肯定につながるのです。

実際に、収益としても大きなものがありま

す。1泊すると、子どもたちはその家に5,000円払います。4人泊まると2万円入るわけです。いつもと大きく変わらない暮らしを続けながら、子どもの受け入れをするだけで収益が得られる。毎日来るわけではないけれども、この収益は結構大きいのです。少ない年金受給額では自分の子どもたちに会いに行きたい、孫たちに会いに行きたいと思ってもなかなか実現しない。でも、民泊で子どもたちの受け入れをすることによって、現金収入が入るから、それを原資にして子どもに会いに行ったり、あるいは子どもが来たときに、何か買ってあげたりできる。そういう意味で、経済的にも非常に魅力のある、プロジェクトになっています。

このNPOの民泊事業は宮古島観光協会、旅行会社などと協力しながら、また、沖縄県内の大学生も協力の担い手として引き込みながら活動しているということです。さらに行政との連携もどんどん進めていくなかで、事業が安定化してきたそうです。

しかし、課題もあります。たとえば小・中学校の子どもを受け入れる場合、事故があってはいけないということで、学校側は海に入ることを禁じているようです。非常に海がきれいなところなので、それを子どもたちに体験させてあげることができない。池間島に住んでいる人たちの多くは、自分たちの島の一番の魅力は海であり、海で採れる魚介類であると考えています。その経験を子どもたちにさせることができない、そういったもどかしさもあつたりする。つまりジレンマも抱えながらの事業ではあるということです。

それでも、先ほど言ったように、前向きに生きる力が持ちにくい状況だった高齢者が民泊事業の受け皿となることで生活に張りが出

る、自分が長生きすることの意味が、こういった事業のなかで見いだされるとおっしゃっていました。

民泊事業の魅力と課題

まとめに入りたいと思います。過疎の離島、池間島に学んだ幸せって何だろうかということですが、それは自分の生が肯定でき、誰もが社会的役割を確認できるということです。

自分の生が肯定できなくなると、また社会的役割が実感できなくなるときに、自分が何者であるのかとか、生きる意味がなかなか見いだせない、そういう状況に陥りやすくなると思うのです。

たとえば僕が普段研究している貧困問題というのは、失業を契機にして、自分の居場所がなくなる、あるいは社会的な役割が見いだせない、そのことによって自己肯定感が下がるということが顕著にあります。今回紹介した事例では、失業というよりは、むしろ、地域社会のなかで、自分の役割が見いだせなくなるということが不安や生きづらさに直結していました。こうしたなかで、民泊事業は不安の解消、あるいは経済的な課題の解消を図っていた。

民泊が面白いのは、ゼロから何か新しいものを生み出しているわけではないということ。あるものを再活化する、ここがミソかなと思っていて、普段の生活をしながら、自分たちの生活の意味付けが変わっていく。やっていることは大きく変わらないけれども、意味が変わる。これが重要です。

ここに開発型観光とは異なる離島の持続可能性があるのではないのでしょうか。宮古島の

周辺にはいろいろな離島があるのです。海がめっちゃくちゃきれいなので、大規模な観光ホテルを造ったり、あるいは君たちが行って写真を撮りたくなる、インスタ映えしそうなおしゃれなカフェをどんどん展開しているようなエリアもあります。よそから大きな資本が入ってきて、開発をしている島がたくさんあるのです。だけど、この島では、あえて、そういうことをほとんどやっていません。この島がずっと維持してきた文化・風習を守る、それを再価値化することによって、島の持続可能性を図っているのです。こうした取り組みはまだまだ発展途上ですが、多世代をつなぎ、島に対するプライドを再活性化する契機となっていることは確かです。

幸せの実現の鍵は「小さくされた人々」のニーズへの協力

社会学を学ぶ皆さんへのメッセージということですが、できるだけ周辺的な地域、場所から、オルタナティブな価値を見いだしてほしいと思うのです。池間島を例にすると、新しいものを、あるいは流行りのものをどんどん作っていくということではなく、その島にしかない、固有の価値みたいなものを再価値化して、そこから持続可能性を図っていく。中心に翻弄されない魅力、そのことの重要性を皆さんにも知っていただきたいなと思いました。

それから、最後、「幸せ」に引きつけて話をすると、小さくされた人々のニーズへの協力が重要だと思います。小さくされた人々というのは、僕がすごく尊敬している本田哲郎さんという神学者がよく使う言葉です。彼は弱い人ではなくて、弱くされてしまった人、

小さい人ではなくて、小さくされてしまった人、社会構造のなかで、弱い立場に立たされてしまった、あるいは社会構造のなかで、小さい立場になってしまった人々のニーズに寄り添うことが大事だと主張しています。

何か問題があったら、声を上げて、みんなで連帯して動けばいいと思うかもしれないけれども、構造的に弱くされた人たちというのは、声をなかなかあげていきにくい、そういう問題を抱えている。なので、そうした見えにくいニーズを拾い上げて、そこに協力する、こういったあり方が社会学を学ぶ皆さん

にとっても重要なと。マスタリー・フォー・サービスの肝はここかなと、僕はずっと思っているのですけれども、いかがでしょうか。小さくされた人々のニーズに、どうやって向き合っているか、協力できるか、そこが鍵になってくるかなと思っています。皆さんも様々なフィールドでこのようなことを考え、実践する経験が得られると幸いです。以上で話は終わります。ありがとうございます。

(社会学部准教授)